

レトリックから見たルターのカテキズム

高井保雄

一、はじめに

二、「私たちは神を恐れ、愛すべきです」という文言の解釈をめぐって

三、レトリックとルター

四、レトリックから見たルターのカテキズム

4.1 レトリックにおける「配置」から見た小カテキズム

4.2 レトリックにおける「修辭」から見た小カテキズム

4.3 レトリックにおける「記憶」から見た小カテキズム

4.4 レトリックにおける「発表」から見たルターのカテキズム

五、現代におけるレトリックとルターのカテキズム

一、はじめに

ルターの「小教理問答書」(カテキズムの訳語として普通「教理問答」が用いられているが、本論はルターのカテキズムの意味や用法を問うものであるから、以下においては邦訳の「小教理問答書」の意味以外では本来の用語である「カテキズム」を用いる)の日本のルーテル教会での用いられ方は、洗礼前の教理教育テキストということに尽きるのではないかと思われる。その礼拝式文の中に、壮年洗礼の際に「聖書及びルターの小教理問答の教理を学ぶこと」⁽¹⁾が明記されている。まさにその言葉通りにルターの「小教理問答書」は「教理」についての学びのために用いられ、それ以外の場合には、ほとんど省みられていないのが実状である。

ルターの小カテキズムは、しかし、教理のテキストとしてはあまりにも簡単すぎるのではないだろうか。その中に含まれる問答数を数えてみると、ちょうど四十問である。ルターの影響を受けたカルヴァンの書いたジュネーブ教会信仰問答では三七三問答、同じく改革派のハイデルベルク信仰問答は一二九問答、カトリック教会の『カトリック要理』では一四八問答となっている。比較してみるとルターの小カテキズムの簡潔さは際だっている。ここにすでにルターの小カテキズムの独自性、すなわち、単なる教理の問答とは言い切れない独自の何物かが存在することが予測されるのである。

しかし、過去の経緯から言えば、この簡潔さを補うかたちで、『ルターの小教理問答』の本文に様々な教理的な解説を付した書がいくつも出版されてきた。⁽²⁾この背景には、やはり、ルターの小教理問答の内容がいささか簡単であるという判断が働いていると言えるだろう。すでに、ルターの同時代の人々からカテキズムというものは簡単な教理であると受け止められていたようで、大カテキズムの序文でルターはつぎのようにこぼしてい

る。「……さらにつぎのような恥すべき悪徳があり、また慢心、飽満という隠れた悪疫がある。すなわち教理問答書などは、くだらぬ取るに足りない教理で、ざっとひととおり目を通せばそれで十分であり、あとはそのまま片隅に投げ捨ててかまわない代物のように考えて、あたかも二度と読むことを恥じるかのような人間どもがた⁽³⁾くさんいる」。

ところで、ルターは、「おそらく奴隷意志論とカテキズムだけが自分の真正の書物だ⁽⁴⁾と思う」と言っている。生涯の内にあまたの著作を送り出したルターにしてそう言わしめているものが、ルターのカテキズムにはあるのである。すなわち、ルター自身が、彼のカテキズムは他の著作をもつてしては代え難い独自性を有した作品であり、かつそのことが十分に表現されているという評価を下しているのである。

そうであるなら、ルターの小カテキズムのこの簡潔さは、決して補足すべき何かが足りないというものではなくて、その叙述が方法的に構想され、思想的構築物の表現として一つの完成の域に達した作品であるが故の必然的結果であると考えなければならぬだろう。

それは一体どのようなことであるのだろうか。また、そのことを究明することで得られるものは何であるのか。本稿では、それらの点につき、レトリックの観点からルターのカテキズム、特に小カテキズムを中心に究明を試みようとするものである。

二、「私たちは神を恐れ、愛すべきです」という文言の解釈をめぐって

小カテキズムの第一部の十戒の部分を一読して誰しも感じることは、第一戒の問いに対する答えの文言「私

私たちはなにものにもまして、神を恐れ、愛し、信頼すべきです」という答えが掲げられ、続いて第二戒から第十戒までの答えの部分は、その第一戒の答えの文言に対応した「私たちは神を恐れ、愛すべきです」という文言が、各戒の問いに対する答えの冒頭に反復されているということである。すなわち、第二戒以降の答えは冒頭に共通の「私たちは神を恐れ、愛すべきです。それで、……」という文章が置かれ、そのあとに「それで、……」以下の叙述の部分が各戒における固有の部分として置かれるという構造になっている。

この「私たちは神を恐れ、愛すべきです」という文言は様々な解釈されている。例えば、ルターのカテキズムについて決定版とも言える注解を書いたペーター・スは、フォン・ラートに則して、イスラエルの主であり救い主である神はまたねたむ神であり、このねたむ神を「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして愛すること」(申命記六・四)がイスラエルの民の地上的実存を規定しており、それが「私たちは神を恐れ、愛し、信頼すべきです」というルターの小カテキズムの第一戒の文言の背景にある中心的なエートスであるとし、第一戒に続くその他の戒めはこの第一戒の「神への恐れと神への愛」を目指し、またそこから展開するという構造を持つており、ルターは小カテキズムにおいて初めてこれを十戒の解釈の構図としたと述べている。⁽⁵⁾

しかし、この文言については、全く別の解釈もある。ヴェンガートはこの文言の意味内容について、ルターの小カテキズムが書かれた当時の歴史的状況にその淵源を見ている。

一五二七年のザクセン選帝侯領の巡察を行ったルターの一行の中にアグリコラとメラニヒトンがいたが、彼らは悔い改めの理解について意見が対立していた。メラニヒトンの理解では、罪への悲嘆は律法とそれへの恐怖から来るというものだった。しかし、律法廃棄論者のアグリコラは、イスカリオテのユダが律法によりとがめを受け、絶望して自殺したのに比べ、ペトロはイエス・キリストを否定したにもかかわらず、キリストの愛

によって悔い改めることができたことを引用して、律法はただ絶望へと人を追いやるのみで、罪への悲嘆は神の愛と福音から来ると主張した。ルターは両者の調停をはかり、福音なしの律法の説教（恐れ）は人を絶望へと導き、律法なしの福音の説教（愛）はキリスト者の自由の誤用につながると主張した。しかし、一五二八年十一月、アグリコラは彼の最も成功した「アイスレーベンの子女学校のための一三〇問」というカテキズムを出版し、その中で、悔い改めは福音から起こるとして、律法を極めて軽んじる考えが公にされるに至った。そこで、ついにルター自らカテキズムを書く事態に及んだ。一五二九年、彼はアグリコラの反律法主義に対抗する必要上、大カテキズムの叙述においては約半分近くの頁数を費やして十戒を中心に位置づけてこれを書き上げた、と述べる。⁶ ヴェンガートによれば、ルターの小カテキズムの中で「恐れと愛」が並立した文言となつてゐるのは、ルターの上記両者に対する調停という考えがそこに反映されているからだといふのである。⁷

このように、「私たちは神を恐れ、愛すべきです」という文言の解釈については、旧約聖書の釈義との関連や、あるいは律法と福音という神学的枠組みからの理解がなされていて、⁸ その本文解釈にはかなりの幅や奥行きがあることを知らされるのであり、ルターの小カテキズムの完成度の高さをうかがわせるものと言ふことが出来る。

ところで、ここでもう一度この文言を本論の出発点であるルターの小カテキズムの簡潔性という点から考えてみたい。確かに、今まで見てきたように「私たちは神を恐れ、愛すべきです」という文言の意味内容に着目して神学的、歴史的な解釈から説明することが可能であるのは事実である。しかし、さらにこの本文の持つ意味の理解には、この文言の字句の意味内容の理解に加えて、その文言の表現様式の理解も欠かせないことであるのは言うを待たない。そして、その文言の字句内容ではなく、その文言が反復されているという定型的な表

現様式にこそ、ルターの小カテキズムを簡潔にしている当のものがあるのである。本論で注目したいのは、従って小カテキズムの文言の字句内容もさることながら、その文言の定型性から見えてくる表現様式である。

この小カテキズムの本文の定型性をいかにルターが重要視しているかについては、ルター自身がその序文で以下のように述べているところからも明らかである。

「第一に説教者に大事なことは、へ十戒へ主の祈りへ使徒信条へ礼典などに関する、種々雑多な本文やかたちを警戒し、これをさけることである。むしろ反対に、一定のかたちを採用し、これを守り、毎年同一のものをいつも用いるべきである。というのは、若い、経験の浅い者は、一定の本文とかたちとで教えるべきであり、もしそうしないで、今日のように、一年中、時としてはこのように教え、ある時は修正してかのように教えるならば、容易に彼らをつまずかせ、あらゆる労苦と勤勉とを無駄にしてしまうだろう」(傍点筆者)。

このようにルターは「一定の本文とかたちとで教える」ことを念頭に小カテキズムの本文を書いたことが知られる。その目的はつとに「若い人々に対しては、一定の、永続的なかたちと方法を守り、まず、何よりもさきに、へ十戒へ使徒信条へ主の祈りなどを、本文に従って、一語一語、彼らが復唱する事ができ、暗記するようにになるまで、教える」(傍点筆者)¹⁰⁾ということだった。「カテキズム」という語はキリスト教における「教え」を意味する代表的な用語だが、元来は「響く、伝える」と言う意味を持つギリシャ語「カテケーオー κατηχεω」という語に由来する。ルターはその小カテキズムの短くしかも定型的な本文を声を出して繰り返し唱えること、すなわち、その音読の響きを通して、記憶させるという方法を用いているのである。従って、小カテキズムの本文にあつては、人々が音読し、記憶しやすいためのレトリック上の工夫が相当になされているものと考えねばならないのである。そして、それだからこそ、ルター自身も「本文に関しては上述したように、これを守り、

ただの一綴りたりとも乱してはならない¹¹⁾」というほどのこだわりを見せているのである。

三、レトリックとルター

レトリックは今日のわが国では一般的に文章作成術、あるいは文章作法というように、書き言葉に関する修辞学として理解されている。しかしルターの時代のレトリックはいささかそれとは違う。

レトリックは最も古くは古代のギリシャ的民主制において他人を説得する弁論術として誕生した。その後、ローマが共和制から帝政に移行すると共に散文の技法が発展し、印刷術の一般化以降は書き言葉におけるいわゆる美辞麗句の類の修辞学、文章術が発達してきた。しかし、中世から近世までその重点が次第に説得から文章作法へ移って来たとはいえ、レトリックは基本的には元来の弁証の骨組みを継承してきた。

ところで、この伝統的なレトリックにおける弁証は次の五つの技術から成り立っている。すなわち、1「発想」の技術、2「配置」の技術、3「修辞」の技術、4「記憶」の技術、5「発表」の技術である。¹²⁾今日の我々は話題のことをトピックという用語で呼ぶが、この語はレトリックの第一の「発想」の技術における「手がかり」を意味するトポス（場所の意）から来ているのであり、現代人のレトリックにもこの伝統は流れ込んでいるのである。そして、ルターが学んだレトリックもこの点では基本的には何ら変わってはいない。

ルターはアイゼナッハの学校ではラテン語の作文と作詩法でクラスの首席を占めるほどに弁論術と作詩を学んだと言われる。さらに人文主義のさかんなエルフルト大学ではいわゆる自由七科（文法、レトリック、弁証論理、数学、幾何、天文、音楽）を通してさらにレトリックを学んだ。しかし、ルターとレトリックの関わり

を考える場合にメランヒトンの存在を抜きに考えることは出来ないだろう。彼は、ルターの陣営の中で弁証の技術を十分に身につけた人物としてルターと共に働き、アウグスブルク信仰告白やその弁証を初めとする諸文書を執筆することになるのである。

メランヒトンは、一五一四年テュービンゲン大学で修士となった後、そこでレトリックと弁証法（ディアレクティック）の教授となったが、⁽¹³⁾ ヴィッテンベルクに来て以来、立て続けに『レトリック』（一五一九年）、『弁証法』（一五二〇年）を出版している。⁽¹⁴⁾ この『レトリック』の序文において、彼は、あまたの神学者が誤った弁証に陥ってしまっているにも拘わらず、ルターはエラスムスやロイヒリンに並んで源泉にまでさかのぼり得た神学者であると讃えている。⁽¹⁵⁾ さらに一五二一年に出版された彼の『ロキ・コムネス（神学総覧）』はプロテスタント最初の組織神学書となったが、ルターがこれを絶賛しているのは良く知られた事実である。実はこの「ロキ・コムネス」という表題にしても、元来はレトリックの用語から来ていて、それが神学の弁証における「一般的な手がかり（ロキ）」という意味で使用されたものなのである。

こういう次第であるので、ルターが大学の改革に取り組んだ際も、レトリックは大変重要視されている。それまで大学教育はアリストテレスのスコラ哲学に基礎を置いてきたが、ルターはこのような教會的學問の基礎を批判し、変わって人文主義的教育に立つ改革を提案した。⁽¹⁶⁾ ルターは『キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト者貴族に与える書 一五二〇年』の中で、大学の改革に言及している。その中で、アリストテレスの自然学、形而上学、靈魂論、倫理学などを批判しながらも、次に引用するように、レトリックについては例外的にこれを容認している。

「私は論理学や修辭学や詩学に関するアリストテレスの著書が、若い人々の雄弁や説教の練習になるため、保

存されるということを、あるいはそれが別の短い形にされて、有効に読まれることを喜んで認めたい。しかし、注解書や学派は取り除かれるべきである。キケロの修辞学が注釈や学派の助けなしに読まれるように、アリストテレスの論理学もまた、大きな注釈書が読まれることなく直接読まれねばならないのだ。しかし、今ではアリストテレスから演説も説教も学ばれていないのであつて、そこからはただ申し分なく論争と疲労だけが生み出されているのである」(傍点筆者)。

以上のことから、ルターがいかにレトリックに関心があり、これを若い人々の教育において重要視しているかということが分かるのである。

そして、この引用傍点部分からも分かるように、ルターのレトリックの捉え方は単に書き言葉の修辞学だけでなく、前述の弁証の第五番目の技術である「発表」(すなわち雄弁、説教、演説)を含めた伝統的なそれであつた。そのことは、更に、ルターのレトリックとの関わりを考える場合、彼は単に弁証における「修辞」の要素だけでなく、他の要素、すなわち、「配置」、「記憶」、「発表」も十分に考慮に入れているということを予想させるのである。

そこで、次節ではレトリック、特に前述の弁証の諸技術の視点からルターのカテキズムを見てみよう。

四、レトリックから見たルターのカテキズム

4.1 レトリックにおける「配置」から見た小カテキズム

まず、第一にルターはカテキズムを「十戒」、「使徒信条」、「主の祈り」、「洗礼」、「聖餐」の五部門に分け、この順序に「配置」している。

ルターのカテキズムの最初の三部門の配置の順序について、これはルターの思考における内的な発展の結果か、あるいは単なる偶然の成立であって考慮に値しないのかという点で、前世紀には大きな論争があった。その論争を通してルターの思考の内的な発展が跡づけられた⁽¹⁸⁾けれども、そのことで偶然説が途絶えたわけでもない⁽¹⁹⁾。しかし、中世後期の諸文献における三部門の配置を比較したマイヤーによれば、十五世紀の中頃までは「使徒信条」、「主の祈り」、「十戒」の順が支配的であった。十戒は十三世紀以来、告解の手助けの意味を持つようになり、大抵の場合、キリストの教えである神を愛することと隣人を愛することという二重の愛の戒めを展開したものと解釈されていた。十四世紀末から十五世紀にかけて、十戒は多様な告解の一基準となっていた。ルター以前にあっては彼のような「十戒」、「使徒信条」、「主の祈り」という順序は極めてまれなことだった⁽²⁰⁾のである。

このことは現在でもあてはまる。例えば、『カトリック要理⁽²¹⁾』では第一部に神と人間の救いに関する教えが述べられ、その大要として「使徒信条」があげられ、「主の祈り」はこのうち人間の神へのあるべき態度としての祈りの典型としてあげられ、「十戒」は第二部の、信仰、希望、愛の最も中心的な対神徳の実践基準として位置づけられている。その順序を抜き出せば、「使徒信条」、「主の祈り」、「十戒」となり、中世以来の構造を保つ

ている。

また、ハイデルベルク信仰問答の場合、その順序は、「使徒信条」、「十戒」、「主の祈り」となっていて、これはカルヴァンのジュネーブ教会信仰問答も同じである。ただ、カルヴァンの最初のカテキズム『信仰の手引き 一五三七年』ではその順序は「十戒」、「使徒信条」、「主の祈り」となっていて、ルターの小カテキズムと同じであった。しかし、一五四一年に改訂され、『ジュネーブ教会信仰問答』と正式に命名されて以来、現在の順序となっている。渡辺信夫はこの順序の変更について、律法から福音へではなく、福音から律法へと展開するのはカルヴァンの神学にとって本質的な所であるとして、この三部門の順序の持つ神学的な意味の重要性を指摘している。⁽²⁾

以上のことから、ルターがそのカテキズムにおいて「十戒」、「使徒信条」、「主の祈り」という順にこれらを配置しているのは極めて独自なことであると言える。この配置と順序の中に、ルターの神学の根本的な構図である「律法と福音」が示され、さらには彼の神学のもう一つの根本構造であるキリスト者の実存における「キリスト中心主義」が、キリスト論を中核とする「使徒信条」を「十戒」と「主の祈り」の間の中央に置くルター独自の「配置」から構造的に示されているのである。⁽²⁾

4.2 レトリックにおける「修辞」から見た小カテキズム

次にルターの小カテキズムにおける「修辞」の点に注目しよう。

最初に、「十戒」の問答の中で「私たちは神を恐れ、愛すべきです」という第一戒の答えの文言が十戒の各戒の答えの部分の冒頭に繰り返されている点であるが、これは修辞学的には首句反復（アナフォーラ anaphora）

であつて、同一の文言をたたみかける技術である。この文言が繰り返し唱えられることにより、十戒の莊重さは勿論、記憶上の効果が図られているのは言うを待たない。

さらに、「使徒信条」においては、第一条 創造について、第二条 救いについて、第三条 聖化についてのそれぞれの答えの部分の最後の文言が「これは確かにまことですよ」という信仰告白の言葉がやはり、繰り返されている。これは、修辭学的には結句反復（エピフォーラ *epiphora*）であつて、ルターは特に「gewisslich（確かに）」という良心（Gewissen）との深い関わりを持つ実存的な意味を付与してこれを繰り返しつつ答えるということで、この言葉の内に、ルターの実存的体験であるキリストによつて義とされた罪人の信仰告白を、これを唱える者全てが自己の経験にすることを目指しているのである。

さらに、前述のように、「使徒信条」の中核には第二条 救いについての箇所です。キリスト論が「わたしは、父から永遠の中に生まれたまことの神であつて、おとめマリアから生まれたまことの人イエス・キリストが、わたしの主であると信じます」と唱えられるが、ルターはこの部分を対句（アンティテーシス *antithesis*）で表現している。しかし、この部分は散文のかたちで翻訳するとそのことがなかなかわかりにくくなる。ところが、これを、詩の翻訳のように分かち書きにするとこの文言が対句であることが、視覚的にも、はつきりする。

父から永遠の中に生まれたまことの神、

おとめマリアから生まれたまことの人

イエス・キリストが、わが主であることを

わたしは、信じます（傍点筆者）

さらに頭韻（アリタレーション alliteration）の箇所も見られる。

例えば、「主の祈り」の第三の願いの答えの部分の冒頭の語句にそれが見られる。

神の良い、恵みある御心は、……実現します

(Gottes guter, gnädiger Wille geschieht)

という具合である。

さらに、数多くの内容を語りつつ、調子を高める技法としての「羅列」は極めて多く用いられている。例えば、「十戒」の第二戒の主の名をみだりに唱えてはならないという部分の答えでは「呪ったり、誓ったり、魔術を行ったり、うそをついたり、だましたりしないで、……神を呼び求め、祈り、ほめたたえ、感謝する」がそれである。

あるいは「使徒信条」の第一条の答えの「神がわたしに、からだと魂、目と耳と、手と足と、理性とすべての感覚を与えられ、今なお保たれることを、わたしは信じます。そのうえ神は、着物とはき物、食物と飲み物、家と屋敷、妻と子ども、田畑と家畜と財産とを、からだと生活に必要なすべてのものと共に、毎日豊かにあたえ、あらゆる危害から保護し、すべての悪から守り、防がれることを、わたしは信じます」という部分、さらに「主の祈り」の毎日の糧の答えの部分それぞれである。

これらの修辭的表現から、いかにルターが小カテキズムの本文をレトリックを駆使して彫琢したのが、良く分かるのである。その口調のリズム感は演劇における科白のような効果をも感じさせるのである。

4.3 レトリックにおける「記憶」から見た小カテキズム

次にレトリックにおける記憶の技術という点から小カテキズムを見てみよう。

前述のように、ルターの小カテキズムは修辭的に見ても、いろんなレトリックを駆使していることが分かるが、これらのことはあげて、キリスト教の知識も経験もない若い人々が暗唱すること、すなわち記憶することが出来るために、簡潔にされていることはこの小カテキズムの序文に見られる所である。⁽²⁶⁾

最初に印刷された小カテキズムは大きな一枚の紙に印刷されていた表であったが、現存していないそうである。⁽²⁶⁾しかし、想像は出来る。おそらく、それを壁に貼り、一つ一つの条項を順序に従って、字の読めない幼な子も含めて全員が声をそろえて唱えたことだろう。記憶のために唱えるとはそういうことを指す。その字面を想像すると、それはちょうど讃美歌の歌詞のようではなかっただろうか。実際、讃美歌の歌詞こそ定型性を要求するものであり、レトリックを要求する最たるものである。初版に続き、直ちに出版された第二版は小冊子の形になり、それには懺悔や、音符付きのドイツ語の連祷と特祷が付け加えられた。⁽²⁷⁾そのように小カテキズムの文言はルターの讃美歌との親近性を初めから持っている。事実、ルターは一五二三年の「われらは新しい歌を歌う」という讃美歌を作つて以来、全部で三十六曲の讃美歌の作詞をしたが、⁽²⁸⁾ルターの作詞した初期のものほとんどカテキズムの讃美歌だった。この当時、ヴィッテンベルクの讃美歌の作家のサークルが出来ていたが、彼らの作る讃美歌は殆どが根本的にはカテキズム讃美歌だった。ルーテル教会の古典的な讃美歌は聖書に基礎付けられ、礼拝の歌として用いられるばかりでなく、典礼の文脈の中で、信仰の宣言を教育的な意図を伴って歌われる。リーバーによれば、二十世紀の後半になってようやく「クリスチャンの経験」についての讃美歌が多く聴かれるが、十八世紀まではあらゆる讃美歌の中にこのようなカテキズム讃美歌のセクションが

あつたほどに盛んであつたのである⁽²⁸⁾。このようなカテキズム讃美歌の伝統の中からバッハのコラールカンタータが誕生するのである。

ルターの小カテキズムの中でも、朝夕の祈りの最後に「十戒やあるいはあなたの敬虔にふさわしい讃美歌を歌いなさい⁽²⁹⁾」と言っているが、この時点（一五二九年）ですでにルターとカテキズム讃美歌の強い結びつきが示されている。

以上のように、ルターの小カテキズムの本文の定型的な簡潔性は、カテキズム讃美歌と、その「記憶」のためという目的においても、定型という文体においても極めて強い親近性を持つことが明らかとなった。そこから言えることは、ルターの小カテキズムは単なる「教理」のテキストではなく、礼拝における「典礼文」としての性格を持っているということである。ヴェンガートもルター派の初期のカテキズムを調べる中で、ルターの小カテキズムと小祈祷書（一五二二年）の関連に思い至り、ルターの小カテキズムは我々の想像以上に祈祷書に近いものだと言っている⁽³¹⁾。

ルターの小カテキズムの座(Sitz)は家庭の中にある。その各条項の見出しに「家長がその家の者に対してこれらをいかに単純に教えるべきかについて」とあるところからそれは明らかである。家庭という文脈の中でこれを朗唱するということが予想されている。この小カテキズムの中の殆どの質問の形態は「これは何ですか」というもので、この質問は実は幼い子供のそれであると解釈する立場がある⁽³²⁾。ヴェンガートによればルターは教会の歴史上初めて自分の子供がしゃべったり質問したりするのを目撃した神学者の一人だとして、小カテキズムには、それが書かれた一五二九年に三歳であつたルターの長男ハンスの問いかけが息づいていると言⁽³³⁾う。

ルターの小カテキズムは礼拝、とりわけ家庭礼拝における典礼文でもあつた。この命題を肯定するときに、小

カテキズムの問答数が極めて少なく、また定型的であることなどが理解できるのである。特に、その後半に様々な場における祈りとその順序が記されていることは、他の教理問答書、例えば、カトリック要理にも、ハイデルベルク教理問答にも見られないところである。

ルターは「ドイツミサと礼拝の順序 一五二六年」の中で、「まず、第一にドイツ語の礼拝では、素朴で、簡潔で平易なよい教理問答が必要である」と言っている⁽³⁴⁾。そして、その後に実際どうカテキズムを礼拝の中で行うのかを主の祈りを例にとって示している。そして、「これらの（カテキズムの）教育は必要に応じて、適切な時に、あるいは毎日、説教壇から説教するとか、キリスト者にしようとする子供達や召使いのために、朝晩家庭で朗読したりするとかの方法で、行わなければならない」と言っている⁽³⁵⁾。具体的には、ルターは二週間に十回の形で説教壇からカテキズム説教をした。週日四回の午後二時からの集まりと、日曜朝の朝祷（マティン）がそれに当てられた⁽³⁶⁾。だから、ルターはカテキズム礼拝を教会と家庭の両方で行うことを考えており、従って小カテキズムもまた家庭礼拝の中で、典礼文として用いられていたのである。

しかし、日本におけるこれまでの小カテキズムの様々な翻訳はそのような典礼文として翻訳されたわけでない。文字通り「教理の問答書」としてであった。そこで、一つの試みとして、私はルターの小カテキズムの各条項を交読文の形に整えてみた⁽³⁷⁾。例えば次のようになる。

第三戒

安息日をおぼえて、これを聖とせよ。

わたしたちは、神を恐れ、愛します。

わたしたちは、神のみことばや説教を重んじ、

これを聖なるものとして、喜んでいき、また学びます

この作業は小カテキズムの場合はそれほど困難なことではない。大カテキズムだところはいかない。つまり、小カテキズムを交読文にすることが簡単に出来るということは、元来この本文の文体が、典礼文としての機能を備えていたからだと言える。その一例として、ルターの地ザクセンやバッハゆかりのテューリンゲンで用いられている『福音主義教会讃美歌』を見てみると、ルターの小カテキズムが記載されており、その各条項に讃美歌の連番が打たれている。⁽³⁸⁾この連番は讃美歌と同じように皆で朗唱するためのものに他ならない。つまり、ここでは小カテキズムが典礼文として用られていたのである。ちなみにバイエルンのルター派の讃美歌の場合、小カテキズムが記載されているが、そういう工夫はされていない。ザクセンやチューリンゲンの伝統として今日に至っているのだろう。

このように、「記憶」という点から小カテキズムを見てみると、その文体はカテキズム讃美歌との親近性や典礼文としての機能が考慮されていることがわかる。事柄がそうであるなら、私たちの「小教理問答書」の文体も、その機能を持つ形に整えることが必要ではないかと思うのである。

4.4 レトリックにおける「発表」から見たカテキズム

最後に、ルターのカテキズムをレトリックにおける発表という点から見てみたい。発表とは発話であり、説教、朗唱、という形でなされる。

レトリックにおける弁証の伝統を極めて重視したルターにとって、言葉とは、やはり第一義的には、書かれた文字ではなく、口頭の言葉であった。ペリカンは次のように言う。「ルターは生涯を通じて、教会の生命と事業におけるこの口頭のことばの中心性を強調した。……ルターの著作で「神のことば」という語に出会うとき、それは普通この口頭のことばをさしている。……キリストご自身、何事も書きたまわなかった。しかし、語り続け、説教し続け、神のことばの基本的な形態は、常に、口頭の宣教のことばであることを明らかにされた。この口頭のことばを強調するために、ルターはまた神のことばの奉仕を特に重要なものとした」と。⁽³⁸⁾この神の言葉の神学から説教と説教職としての教職が極めて重視されることとなる。キリストの説教、すなわちキリストによって語られた福音の言葉が、ルターの言語観の中心にある。

口頭のことばを重視するルターにとって、書かれた言葉は第二義的なものである。その意味で、彼にとって聖書は二次的な意味で、「神のことば」であった。⁽⁴⁰⁾

ピノマはルターの聖書に対する見方を次のように言う。「注目すべき方法で、ルターは現代の様式批評の主要論議に先鞭をつけたのである。それは、福音書の日課が、もともと個々の説教の原文や、口伝であって、のちに現在の福音書の形に集められたと主張する」。⁽⁴¹⁾神のことばでありつづけるためには、口頭のことばは、書かれたことばを必要とする。初代教会で、口頭のことばが衰え始めたとき、使徒たちは、それがもう一度説教されるために、それまで説教してきたことを、紙に書き記すようになったのである。⁽⁴²⁾

こうして、ルターにとって聖書は、口頭で語られる神のことばを支え、神のことばを誤謬から守るための記録としての二次的な意味を持ったのである。ルターが彼以前にすでに幾多の聖書のドイツ語訳がなされたにも関わらず、ラテン語の聖書からではなく、聖書のもとと書かれたことばであるヘブル語やギリシャ語から翻

訳したことや、一つ一つの訳語が人々の日常の生活用語とつきあわされて翻訳されたことなども、聖書のことばは本来、神が語られ、それが人々のただ中で聞かれ、受肉することば、すなわち神の福音の説教のことばを目指すものだった故である。ルターが小カテキズムの序文の最後に、その本文を一字一句ゆるがせにはいけないといったのも、こうした神のことばを誤り無く語り継ぎ、聞き継ぐことを意味しているものであり、そのように「発表」されることが目指されているのである。

ルターの大カテキズムの序文の末尾で、彼は、次のように言っている。

「しかしながら、これらのことばだけをおぼえて、唱えることができるだけで十分だと思つてはいけない。若い人たちを説教に、特に教理問答のために定められた期間の説教には出席させて、その説明をきき、各部門の内容を理解するように学ばさなければならぬ。彼らがきいたとおりに暗唱ができ、また問われたときに、りっぱに正しく答えることができて、説教がむなしく、実を結ばないままになつてしまわないようにしなければならぬ。それで私たちはしばしば教理問答を説ききかせて、若い人たちの心にうえつけ、しかも、それがよく彼らの心にしみこみ、記憶にとどまるようにと、高尚な学問的な説き方は避け、極めて簡潔にと努力している⁽⁴³⁾のである」。

ここから、なぜルターのカテキズムが二種類、すなわち、説教の形式を取っている大カテキズムと問答体の形式を取った小カテキズムの二種類あるのか、その理由が明らかになる。要するに、ルターにとって言葉の十全なかたちは書かれた言葉ではなく、口頭のことば、すなわち説教であり、カテキズムもまた十全なものとしてはその形を取るべきであったのである。⁽⁴⁴⁾しかし、レトリックの他の要請、特に記憶のために暗唱するには定型性を持たせる必要があり、この両方の条件を満たすために、ルターにあつては両方のカテキズムが作られる

ことが必要だった。それで同じ一五二九年に先に大カテキズムが、あとに小カテキズムが出版されたのだろう。従って、ルターの大小のカテキズムの相違は、その対象（一方は牧師に対して、他方は単純な人々に対して）の相違というよりは、教えを伝えるに当たったのルターのレトリック上の要請（一方は「発表」、他方は「記憶」）の相違から来ていると言える。

五、現代におけるレトリックとルターのカテキズム

以上のように、ルターのカテキズムをレトリックとの関連で見てくると、ルターのカテキズムは伝統的なレトリックにおける弁証の諸要素と極めて密接な関連の中で書かれたことがあらためて理解できるのである。そして、そこからルターのカテキズムが単に「教理」のテキストとしてだけでなく、多様な側面を有していて、しかも極めて完成度の高い作品であることが理解できた。

歴史的に見れば、ルターのカテキズムは後になってルター派の信条と目されるに至った。ルター派の和協信条（一五七七）の梗概では、ルターの大小のカテキズムを「信徒の聖書」とみなし、その中に、聖書で詳細に論じられていることと、救いのためキリスト者が知る必要のあることとの全部が含まれていることを認める、とされている⁽⁴⁵⁾。

これらのことをまとめみると、ルターのカテキズムは、教理のテキスト、礼拝における典礼文、信徒の聖書、信仰告白という多様な側面がある。

現代におけるカテケシス（教会教育）においては、信仰の教育に「教理学習書」を用いる方法に頼ること

の欠陥がますます明らかになったと言われている。つまり、信仰は書物を学習することによってのみ次の世代に伝えられるものではないというのである。そして、カテケシス（教会教育）の主な源泉として四つの源泉があげられている。それは聖書、教理、典礼、経験である。⁽⁴⁶⁾ 上述のように、ルターのカテキズムは教理、典礼、聖書、信仰告白の側面を持っており、この現代のカテケシスの要請に答える要素を持っていると言うことが出来る。⁽⁴⁷⁾

ところで、今日のレトリック研究者が視野に入れているのは、美術、建築、創作舞踊、現代音楽など多様な主題にみられるような「目的を持った象徴的行為」である。しかし、またその基本線は、明晰な主題を説得力のあるコミニケーションによって伝えることにある。⁽⁴⁸⁾ 現代の私たちに必要なことは、ルターのカテキズムと彼のレトリックを十分に理解し、その内容を現代にふさわしいレトリックを用いてそれぞれの目的にふさわしく読み解き、書き直し、宣べ伝えるということではないだろうか。その具体的な一例として音楽におけるバッハのカンタータをあげておきたい。

バッハの音楽における象徴法がレトリックを手引きとしてなされているということは今日ますます確かなものと認められている。バッハにあつては音楽とレトリックは深い関係を有していた。音楽は一種の弁論であり、教会音楽は一種の説教であつた。説教が神のことばを宣べ伝え、教化し、聞く者に感動を与えるように、バッハにあつては教会音楽もまたそのために用いられるのである。⁽⁴⁹⁾ バッハの研究者ガイリンガーは次のように言う。「彼はルター派のコラールを、ひそかにくり返しくり返し用いた。プロテスタントの伝統にかくも深く根ざした音楽家にとって、ルター派の讃美歌の宝庫は、まさに彼の芸術の根底をなすものであつた。彼はこれらの讃美歌をきわめて多彩に編曲することによって声楽作品の中に含めたばかりか、またそうすることによって自分

が伝達しようと欲したメッセージを明確に出来ると思われたときにはいつでも、コラールの旋律そのものを挿入したのである。これらの讚美歌はルター派のどの信徒にも良く知られていたので、バッハはそれらを引用したとき、彼が心に抱いたものを聴き手は理解するであろうと考えることができたのである。たとえば、これらの聖なる旋律の一つが楽器によつて奏されても、会衆は必ず、彼らの知っている言葉とその旋律を結びつけ、このようにして教会音楽の作品はより深い意味を吹き込まれたのである⁵⁰」。

ここには、ルターの小カテキズムがその定型的な言葉を通して人々に神の言葉を暗唱させることがキリスト者の生活の基盤となること、そして、そのことを前提にして初めて可能になった、音楽のレトリックによる神の言葉の語りかけというカテキズムの目指す到達点の一つの姿が示されている。

このように現代に生きる私たちの目の前には、神の言葉を自分たちのレトリックで表現したルターのカテキズムや、バッハのカンタータといった偉大な作品が置かれている。これらの作品は、私たちにも、神の言葉について、文学を初めとして、美術、建築、演劇、舞踊、音楽、映像など多様な「目的を持った象徴的行為」を、それぞれのレトリックを通して表現することにより、「新しい歌を主に向かって歌う」ことを促しているように思ふのである。

注

- (1) 『礼拝と洗礼』 日本ルーテル教会 一九八三年 三〇頁
- (2) 石居正己「ルターのカテキズム」、『テオロギア・ディアコニア』Vol. 28 一九九四 一六頁参照
- (3) WA 30. 1. 126. 「大教理問答書」 一五二九 「ルター著作集」 第一集八巻、三七四頁
- (4) WA Br. 8, 99, 7f ヴォルフガング・カビトール宛の手紙
- (5) Albrecht Peters, *Kommentar zu Luthers Katechismen*, Bd. 1 Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1990, S. 61f.
- (6) Timothy Wengert, "Forming the Faith Today through Luther's Catechisms", *Lutheran Quarterly*, Vol. 11, No. 4 1997, p. 386ff.
- (7) Timothy Wengert, op. cit.
- (8) 小林政吉はルターのカテキズムの成立過程に対して緻密な分析を行い、この文言について、それまでの律法による人間の罪の自覚と神の贖罪による罪の赦しという義認論に、その後の歴史的経緯から、神の独一性に対するおそれと信頼というあたらしい要素がここに説明の原理として加えられたのだと鋭く指摘する。しかし、この文言のもう一つの意味内容である「神を愛する」ということについての説明はそこでは欠落している。小林政吉『宗教改革の教育史的意義』創文社 一九六〇 一三三頁参照
- (9) WA. 30. 1. 348 「小教理問答書」 一五二九 「ルター著作集」 第一集八巻 五六八頁
- (10) WA. 30. 1. 349 「小教理問答書」 前掲書 五六九頁
- (11) WA. 30. 1. 350 「小教理問答書」 前掲書 五七〇頁
- (12) 佐藤信夫「レトリック」『平凡社大百科事典』一九八五年 一五巻 九五二頁
- (13) Martin Brecht, *Martin Luther*, Calwer Verlag, Bd. 1, 1981, S. 266
- (14) 当時のメランヒトンの状況については、R. シュトゥウベリッヒ『メランヒトン—宗教改革とフマニスムス』、倉塚平訳 聖文舎 一九七一 四八頁以下参照
- (15) Martin Brecht, *ibid.*
- (16) ルターの大学改革に際してのアリストテレス哲学に対する批判については、金子晴勇『ルターとその時代』玉川大学出版部

一九八五年 二二一頁以下参照

- (17) WA 6, 458 キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト者貴族に与える書 一五二〇年 ルター著作集 第一集 二卷 二九〇頁以下参照。更にルターは「文法や他の修辭諸学がなかったとしたら、説教者や法律家や医師はどこから出て来るであらうか。彼らはみなこの《文法や修辭学という》泉から流れ出てこなくてはならない」と繰り返し言及している。
- WA 30, 2, 579 「人々は子どもたちを学校へやるべきである」という説教 一五三〇年」ルター著作集 第一集 九卷 二二〇頁
- (18) Albrecht Peters, a. a. O. S. 38ff.
- (19) 偶然説を取る論者に Gottschik, Fror, Fraas がいる。Albrecht Peters, ibid.
- (20) Johannes Meyer, *Historischer Kommentar zu Luthers Kleinen Katechismus*, Gütersloh 1929, S. 82
- (21) 『カトリック要理』(改訂版) カトリック中央協議会 サンパウロ 一九七二年
- (22) カルヴァン『ジュネーブ教会信仰問答』渡辺信夫訳 教文館 一九九八年 一二六頁
- (23) Albrecht Peters, a. a. O. S. 48ff.
- (24) マルティン・ルター『小教理問答書』内海季秋、宮坂亀雄訳 改訂新版 一九八〇年 聖文舎 一五頁
- (25) 注一〇参照
- (26) 内海季秋『小教理問答書』の解説『ルター著作集』第一集八卷 五六四頁
- (27) W. D. Allbeck, *Studies In the Lutheran Confessions*, Fortress Press, Philadelphia 1961, 邦訳『福音的信仰の遺産』石居正己訳 聖文舎 一九六九 二九五頁以下
- (28) 徳善義和「讚美歌」『ルターと宗教改革事典』教文館 一九九五年 一三二頁
- (29) Robin A. Leaver, *Luther's Catechism Hymns 1. "Lord Keep Us Steadfast in Your Word"*, *Lutheran Quarterly*, Vol 11, No. 4 1997, p. 398 ff.
- (30) 小教理問答『ルーテル教会信条集(一致信条書)』聖文舎 一九八二年 五〇五頁
- (31) Timothy Wengert, op. cit. p. 391

- (32) この質問を幼児の父親への問いとして訳したものに、徳善義和訳「小教理問答」「宗教改革著作集」第一四巻 教文館 一九九四年 所収 がある。
- (33) Timothy Wengert, op. cit. p.388
- (34) WA. 19. 76 「ドイツミサと礼拝の順序」一五二六年「ルター著作集」第一集六巻 四二四頁
- (35) WA. 19. 76 「ドイツミサと礼拝の順序」op. cit
- (36) 石居正己 前掲書 八頁
- (37) その全文については 拙稿「ルターの小教理問答による交読文試案」「教会と宣教」日本福音ルーテル教会東教区 第四号 一九九八年 一六〇頁以下参照
- (38) Evangelisches Kirchengesangbuch, Evangelische Verlagsanstalt, Berlin 1988 800-860
- (39) Jalslav Pelikan, *Luther the Expositor*, Concordia Publishing House, 1959, 邦訳「ルターの聖書釈義」小林泰雄訳 聖文舎 一九七〇 七二頁以下
- (40) Ibid. 七六頁
- (41) A. Pinoma, *Faith Victorious*, tr. by Walter J. Kukkonen 邦訳「ルター神学概論」石居正己訳 聖文舎 一九六八 二二六頁
- (42) Jalslav Pelikan, op. cit, 七八頁
- (43) WA. 30. 1. 132 「大教理問答書」一五二九年「ルター著作集」第一集八巻 三八五頁
- (44) ルターにおいて口の言葉が優位性を持つことについては 江口再起「始めにことばがあった」「ルター研究」第三巻 聖文舎 一九八二 三二頁以下参照
- (45) 『ルーテル教会信条集（一致信条書）』一九八二年 聖文舎 六九五頁
- (46) D. Konstant, 「カテケシス」『キリスト教神学事典』教文館 一九九五年 九三頁
- (47) 現代のカテケシスとカテキズムについては 拙論「ルーテル教会の教会形成におけるルターのカテケシスとカテキズム」「教会と宣教」日本福音ルーテル教会東教区 第一号 一九九五年 九〇頁以下参照

- (48) Claig. A. Loscalzo 「レトリック」『世界説教・説教事典』日本基督教団出版局 一九九九年 五五〇頁以下
- (49) 磯山雅 「バッハ＝魂のエヴァンゲリスト」東京書籍 一九八五 一五四頁以下参照
- (50) K・ガイリンガー 「バッハの音楽における象徴法」『バッハの世界』バッハ叢書九 白水社 一九七八 一六頁